桂萱村63号墳

2003

前橋市教育委員会

例　　言

1．本報告書は、桂萱村63号墳発掘調査報告書である。
2．調査主体は、前橋市教育委員会である。
3．発掘調査の要項は次のとおりである。

調　査　場　所	群馬県前橋市荻窪町１０７９－２・３
発掘調査期間	平成15年５月26日～平成15年６月12日
整理・報告書作成期間	平成16年３月１日～平成16年３月31日
発掘・整理担当者	真塩　欣一・鈴木　雅浩・齊木　一敏・飯田　祐二・大崎　和久・須藤　健夫 高山　剛・小峰　篤

4．本書の原稿執筆・編集は齊木・大崎が行った。なお、井上　唯雄文化財整備指導員より多大なご教示をいただいた。
5．発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。
赤城美代子・粟岡エミ子・生方かほる・佐野貴恵子・戸丸　澄江・内藤　孝・舩津　明美・松田富美子
湯浅たま江・湯浅　道子
6．発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は、座標北である。
2．挿図に国土地理院発行の1/25,000地形図（前橋）、1/2,500前橋市現形図を使用した。
3．本発掘調査の略称は、15D20である。
4．遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。
遺構　　全体図・断面図…１/80，石室全体図・断面図…１/40
遺物　　土器…１/３，１/４　鉄器・鉄製品…１/２，１/３
5．計測値については、（　　）は現存値、［　　］は復元値を表す。
6．セクション注記の記号は、締まり・粘性の順で示す。
○は締まり・粘性あり、△は締まり・粘性ややあり、×は締まり・粘性なしを表す。
7．遺構平面図の●は土器、△は鉄製品の出土場所を表す。
8．スクリーントーンの使用は、次のとおりである。
遺構断面図　　構築面…斜線、裏込め…アミかけ

目　　次

例言・凡例
本　　文
Ⅰ　調査に至る経緯　…　1
Ⅱ　遺跡の位置と環境　…　1
Ⅲ　調査の方法と経過　…　4
Ⅳ　遺跡の概要　…　5・6

挿　　図

Fig. 1　周辺遺跡図
2　位置図
3　遺跡全体図
4　セクション図
5　石室実測図
6　土器実測図
7　鉄製品実測図(1)
8　鉄製品実測図(2)
9　鉄製品実測図(3)
10　鉄製品実測図(4)

Ⅰ　調査に至る経緯

平成15年５月１日、青木　束氏より「耕作をするのにじゃまな石があったので重機でどかそうとした。どうも古墳の石であるらしい。古墳であるという認識はなく、埋蔵文化財の包蔵地の開発に際して事前の届出の必要なことも知らなかった。」という相談を受けた。前橋市荻窪町1079-2・3には、昭和10年の県下一斉の古墳調査で確認された桂萱村63号墳が所在することから、周知の埋蔵文化財包蔵地は土木工事の際必ず届出が必要なことを伝え、記録保存のための調査協力をお願いした。５月９日、県教育委員会文化課と協議し、埋蔵文化財発掘の届出を提出してもらうこと、事前の記録保存に協力してもらうことを確認した。５月12日、文化財保護課において、教育委員会と地権者である青木　博久・青木　束両氏との間で今後の古墳の発掘調査に関して協議を行い、調査期間、調査方法、提出書類を確認し合った。５月16日付けで、青木　博久・青木　束氏より前橋市教育委員会　教育長　桜井　直紀宛て埋蔵文化財発掘調査について（調査依頼）と埋蔵文化財発掘の届出について（57-2）が提出された。そして、５月26日より現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称「桂萱村63号墳」は、上毛古墳綜覧によるものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

前橋市は、地質・地形から東北部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地の利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯の４つの地域に分けられる。

本遺跡は赤城火山斜面に立地し、前橋市街地より北東約８㎞の荻窪町1079-2･3に位置する。荻窪町は、前橋市の北東端であり、東側は勢多郡大胡町と境を接している。遺跡のすぐ東に寺沢川が南流しており、南約5.5㎞の地点で広瀬川に合流している。また、遺跡の北約２㎞には群馬用水、南約１㎞には大正用水が東に向かって流れている。赤城火山斜面は、ところどころ山麓を源にする中小の河川が南流することによって形成された舌状の台地をいくつも持っており、比高差10m前後の断崖をなしている。赤城火山斜面では、台地部は畑地、桑畑等が展開され、河川によって形成された谷地部には水田が営まれる。本遺跡地は台地上に位置し、梅林及び畑である。

２　歴史的環境

本遺跡の立地する赤城山南麓は、旧石器時代から中・近世にかけての多くの遺跡が調査され「文化財の宝庫」と呼ばれている。

荻窪地区は桂萱地区に属するが、これは前橋市編入前の桂萱村である。桂萱村は昭和10年の県下一斉調査の折には79基の古墳が確認されている。これは、赤城山南麓では荒砥村、粕川村に次いでの多さとなっている。荻窪地区の古墳は昭和10年の調査で９基が確認されている。すなわち、勢多郡桂萱村第57号墳から65号墳で、小字別でみると、清水に４基が登載されているほか、宮本、入田、岡替戸、神明前、大日に各１基の登載がみられる。

この内、最大のものはほつこし塚古墳（58号墳）で63号墳の北西300ｍほどの旧米野街道の南に接して存在する。現状でみると北側は道路で周堀部分が削られているが、径72尺、高さ８尺とされるおもかげをとどめる円墳であることが分かる。ただ、墳丘中央部は南北方向に幅６ｍ、長さ９ｍの規模で堀状に深さ１ｍほど削り取られている。土地の人の伝承によれば、現在墳丘西側に階段状に片岩様の板石を並べたものがあるが、この石が掘り出されたものであるという。並べられている板石は５枚で、平面形は８０㎝×５５㎝、厚さ２０㎝ほどで揃っている。この内、一枚は角部を切り組んだ状態が認められる。この他、大きい蓋石は橋に転用したという。さらに、古墳の掘削面の下部には大きな板石がそのまま埋められているという。

これが事実とすれば、いわゆる組合せ式石棺で、大きい底石に板石をはめこんだものと想定され、上部を蓋石で覆った形式のものと推定されるが確かなことは未確認である。後期古墳に属するものとみられるが63号墳に先行する本地域最大の古墳として注目される。出土品としては、上毛古墳綜覧に２尺３寸（69㎝）の長刀が出土したという記載がある。

Fig.1 周辺遺跡図

○周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	遺跡の主な時代・概要
1	荻窪鰯塚遺跡	前橋市荻窪町	集落	奈良～平安時代の竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡10棟他
2	荻窪東爪遺跡	前橋市荻窪町	集落？	縄文時代前期の竪穴住居跡2軒
3	荻窪倉兼遺跡	前橋市荻窪町	集落	奈良～平安時代の竪穴住居跡29軒・掘立柱建物跡12棟他
4	ほつこし塚古墳	前橋市荻窪町	墳墓	7世紀代の円墳（58号墳）
5	川白田遺跡	前橋市小坂子町	集落	縄文時代前期の竪穴住居跡22軒・土坑338基他
6	小坂子城跡	前橋市小坂子町	城郭	中世の城郭
7	小坂子要害城跡	前橋市小坂子町	城郭	中世の城郭
8	小坂子油田遺跡	前橋市小坂子町	墳墓他	7世紀代の円墳3基
9	新田塚古墳	前橋市上泉町	墳墓	7世紀代の円墳，径30m，高さ4.5m
10	桧峯古墳	前橋市上泉町	墳墓	自然石使用の横穴式石室
11	桧峯遺跡	前橋市上泉町・五代町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の竪穴住居跡76軒他，第62号住居跡からは奈良三彩小壺が出土
12	五代江戸屋敷遺跡	前橋市五代町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の竪穴住居跡54軒他
13	五代伊勢宮遺跡	前橋市五代町	集落	縄文時代中期の竪穴住居跡6軒他，古墳時代後期以降の竪穴住居跡10軒他
14	大日塚古墳	前橋市五代町	墳墓	7世紀前半の円墳，出土品多数
15	五代桧峯遺跡	前橋市五代町	集落	古墳時代後期の竪穴住居跡2軒
16	鳥取東原遺跡	前橋市鳥取町	墓地他	近世の埋葬施設1基，土坑6基
17	鳥取福蔵寺遺跡	前橋市鳥取町	集落他	縄文時代前期から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡41軒，9世紀中頃の鍛冶精錬遺構
18	鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	前橋市鳥取町	集落	奈良～平安時代の竪穴住居跡28軒，旧石器時代の細石器出土
19	芳賀北原遺跡	前橋市鳥取町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の竪穴住居跡10軒
20	芳賀東部団地遺跡	前橋市鳥取町・小坂子町・五代町	集落他	縄文時代の竪穴住居跡60軒他，古墳時代から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡495軒・製鉄遺構5基,古墳4基
21	芳賀西部団地遺跡	前橋市鳥取町・小神明町・五代町	墳墓他	縄文時代前期の竪穴住居跡7軒，古墳時代後期の円墳28基・方墳1基（初期群集墳）
22	芳賀北部団地遺跡	前橋市勝沢町・小坂子町・嶺町	集落他	奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡234軒・掘立柱建物跡7棟・製鉄遺構3基
23	芳賀北曲輪遺跡	前橋市勝沢町	集落他	縄文時代の竪穴住居跡25軒，7世紀代の円墳6基
24	西田遺跡	前橋市鳥取町	墳墓他	古墳時代中期の竪穴住居跡4軒，6世紀中頃の古墳5基
25	倉本遺跡	前橋市鳥取町	集落他	弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡2軒
26	小神明遺跡群	前橋市勝沢町	集落他	縄文時代から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡9軒
27	九料遺跡	前橋市勝沢町	集落	古墳時代後期の竪穴住居跡34軒他
28	勝沢城跡	前橋市勝沢町	城郭	中世の城郭
29	芳賀村第49号墳	前橋市勝沢町	墳墓	円墳，径18m，高さ3.3m
30	オブ塚古墳	前橋市勝沢町	墳墓	6世紀後半の前方後円墳
31	嶺城跡	前橋市嶺町	城郭	中世の城郭
32	桂正田稲荷塚古墳	前橋市嶺町	墳墓	7世紀後半の方墳
33	東公田古墳	前橋市嶺町	墳墓	7世紀後半の円墳

34.西天神遺跡　35.横沢新屋敷遺跡　36.芳山遺跡　37.宇持遺跡　38.堀越丁二本松遺跡　39.横沢城跡　40.横沢向田遺跡
41.大胡町第36号墳　42.大胡町第38号墳　43.横沢向山遺跡　44.大胡町第39号墳　45.大胡町第40号墳　46.堀越甲真木遺跡
47.茂木二本松遺跡　48.横沢柴崎遺跡　49.足軽町遺跡

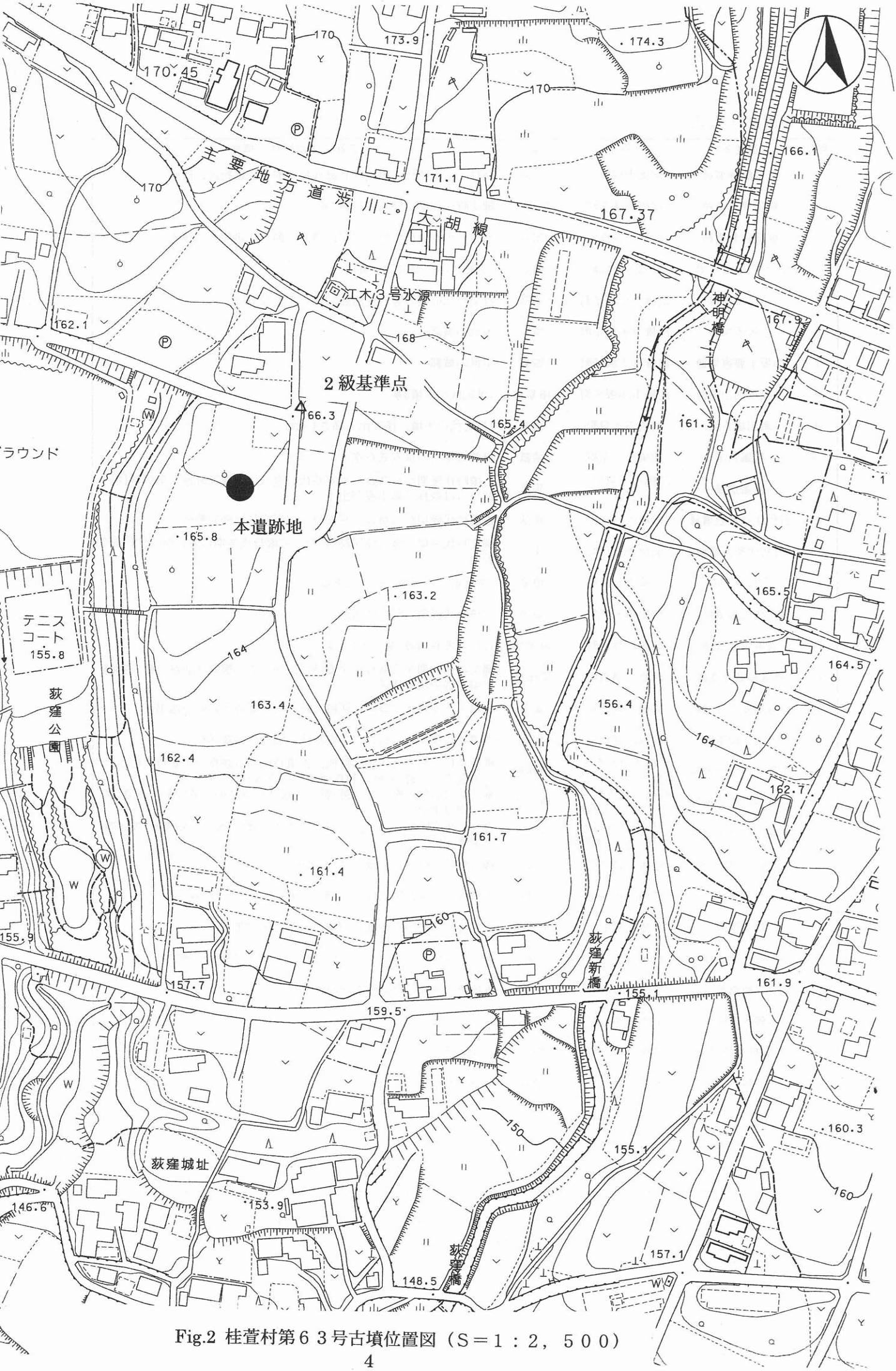


Fig.2 桂萱村第６３号古墳位置図（S＝１：２，５００）

Ⅲ　調査方針と経過

1　調査方針

発掘調査箇所は、前橋市荻窪町の果樹園と畑二筆である。近くの道路脇にある第二級基準点を使用し、そこから南へ47m、西へ34mの箇所をPoint１（以下、Ｐ１と略す。）、そこから南へ８ｍの箇所をＰ２、そこから東へ８ｍの箇所をＰ３、そこから北へ８ｍの箇所をＰ４とした。つまり、石室を囲むように北西の杭をＰ１とし、南西をＰ２とし、南東をＰ３とし、北東をＰ４とし、この４点で一辺８ｍの方画になるように設定した。

使用した第二級基準点の公共座標は次のとおりである。

第　Ⅸ　系	Ｘ＝＋46700.303	Ｙ＝－62964.043	（新座標）
	Ｘ＝＋46345.478	Ｙ＝－62672.078	（旧座標）
緯　　度	36° 25′ 07″ .831	経　　度	139° 07′ 52″ .345
子午線収差角	25′ 00″ .677	増　大　率	0.999949

調査方法は、開発を行う東半分は表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写真撮影の手順で行った。西半分については開発を行わないということなので、東西方向のトレンチを設定し、石室の西壁の裏込めの状況と周堀の確認だけを目的に行った。

図面作成は、平板・簡易遣り方測量を用い、遺構平面図は原則として１/40、遺構断面図は１/20の縮尺で作成した。また、石室については平面図・断面図ともに1/20の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をしながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

2　調査経過

発掘調査は５月26日より現地調査を開始した。青木　東氏が準備してくれた重機（バックフォー0.125㎥）で東半分の表土掘削を行った。それと平行して、鋤簾による遺構確認を行った。西半分については、東西方向の幅１ｍのトレンチを設定し、手掘りで掘削を開始した。28日には石室の精査に入り、崩れた石室に関係する石を取り出す作業を行った。また、この日に杭打ちも行い、遺構の掘り下げ・精査に入った。

図面作成は、遺構の掘り下げ・精査と平行し行った。27日には墳丘及び周堀の断面図、28日には石室の平面図及び断面図、墳丘及び周堀の断面図を作成した。29日には精査及び図面関係がすべて終了した。

最後に、写真撮影を30日に行い、現地調査が終了した。その後、重機を協力してくださった青木　東氏の都合で６月12日に埋め戻しを行った。

その後、整理作業を行い、３月31日までにすべての作業を完成させる運びとなった。

Ⅳ　遺跡の概要

1　墳丘の立地と規模

墳丘は赤城南麓にみられる開析谷で画された舌状台地先端部に造られている。台地は北西から南東方向に張り出すがその先端部を利用して作りつけられた「山寄せ」形式の円墳である。台地基部に近い部分を深く、先端部を浅く周堀が掘り込まれている。旧地形を示す基盤ローム層の高さでみると墳丘中央部と台地先端部では約60㎝の高さの違いがあることが分かる。

これらのデータを基準として墳丘の形状をみると、周堀は正円形ではなく南北に長い卵形を呈している。これは石室の開口方向を意識した結果とみている。これでみると、本古墳の外形は、長径13.5m×短径11.6mの墳丘規模とみることができる。

2　石室の設置と規模

石室は墳丘の南に開口しているが、その構築手順をみると、まず、石室南の部分を基準に傾斜地を掘りくぼめて石室を設置する土坑を掘っている。最も深い奥壁部分と石室前面部の高さは約１ｍ強のレベル差がみられる。土坑の範囲は石室の形状に合わせた徳利状で、長さ4.8m（16尺）、最大幅は玄室部1.7m、羨道部長0.7mほどである。この掘り込みの中を平らにし奥壁を設置し、順次側壁を南側に延長していく。ほぼ半分の高さまで積み

上げた段階で裏込めを詰めるが、外側に径20～25cmほどの山石を据え、側壁との間に円礫混じりの砂を詰める。現状での厚さは50cmほどである。

石室の規模は基本的には平面プランの確認だけが可能である。平面プランは胴張りを持つ玄室に羨道がつく横穴式両袖型石室である。奥壁幅1.5m、玄室最大幅1.7m、玄室長2.4mで、玄門部に板状の玄門柱が立つ。羨道部幅は玄門部、羨門部がそれぞれ0.6m、0.8mでほぼ直線状を呈する。天井部分の確認はできないが、奥壁周辺の壁石の上面が一定で整っていること、裏込め石の状態が天井石を押さえる状況が認められることなどからほぼ現状奥壁上面と合致すると考えられる。その観点に立てば、天井高は1.1mとみることができる。また、羨門は角石で閉塞され、床面は小ぶりの円礫が敷き詰められている状況であった。

3　石室前の施設－前庭部

羨道部の前は構築時の地表面を扇状に削り取って、一段低い平坦面が形成されている。羨門部のみは石室入口に合わせて壁と直交して側壁面から20cm東まで直角に石積みを延長し、そこから20度の角度で先端が扇状に開き、周堀に達している。平坦部は黒色土で汚れており、ここが露出していたことは確実である。西側は未掘で全貌は不明であるが、東半分の状況で復元すれば前庭基部1.6m、扇端部長5m、南側の周堀までの距離4mの範囲を削り取り整地する。基部以外は全く石積みはみられない簡便な作りである。

4　出土遺物

遺物は玄室内及び前庭部、東南周堀部の三地点から検出されている。

(1)玄室内出土遺物

石室はすでにかなり破壊が進行していたため、遺物の出土は期待されなかったが、東壁部分に落下した側壁石を取り除いたところから、大刀一振、刀子一振、鉄鏃４１本が検出された。この部分の床面が汚染されていなかったところから、石室破壊の際、側壁が崩壊し、壁際の部分を覆ってしまったため発見されなかったものと推測される。他の床面は敷石の汚染がみられたことからすると、もし遺物があったとしても持ち出された可能性がある。なお、他に鉄鏃周辺で人骨片が散在しているのを確認した。

(2)前庭部出土遺物

前庭部石室よりの北半分で、須恵器平瓶１、土師器坏２が出土している。平瓶は小型で体部がやや扁平化する様相が見てとれる。焼きは比較的良好である。土師器坏は小型で丸底、口辺がやや内湾する形で削りの技法が顕著である。墓前祭祀に関連する遺物であろう。他に、甕片もある。

(3)周堀部出土遺物

南東部周堀内から集中して出土した須恵器群で甕３個体の存在が確実である。その種類は大型、中型、小型の三種がある。（その内の大型、小型を本報告書に掲載。）大型のものは器高45.4cm、最大幅45.8cmで堅く焼き締められ自然釉がみられる。小型のものは器高24.5cm、最大幅25.2cmでやや焼きが甘い灰色を呈する。焼成後に底部に穿孔した様子が見られる。

これが当初からこの周堀内に置かれたのか、墳頂部から崩落したのか即断できないが、出土位置が旧地形の最も低い地点に当たることを考慮すると一部は墳頂から転落したものとみられる。

5　古墳構築の時期について

桂萱村63号墳は山寄せ式の小円墳である。この古墳の構築がいつなされたかについて、次の点を拠り所とすることができる。

まず、規模や構築技法から見てみると明らかに省力化に主眼が置かれた小円墳である。台地先端部に石室を構築する位置を１m以上も掘り込んで石室を据え、背後の高い部分から出た掘削土を盛り土として石室を覆う手法は古墳後期後半の群集墳によくみられる技法である。また、前庭部の旧表土を削っただけの石積みのない作りや、そこから出土した土器類も明らかに７世紀も後半、末葉に近い時期の所産とみられるし、鉄製品の鏃や大刀の作りも時期の下がることを示している。

石室自体の作りをみても玄室の胴張りの度合いがかなり大きく、玄室入口部の玄門柱石の存在も終末期古墳の様相をみせている。

これらを総合すると、本古墳は後期古墳としての特徴を具備していること、また、出土遺物から遡っても７世紀第４四半期としての様相としてとらえることができる。

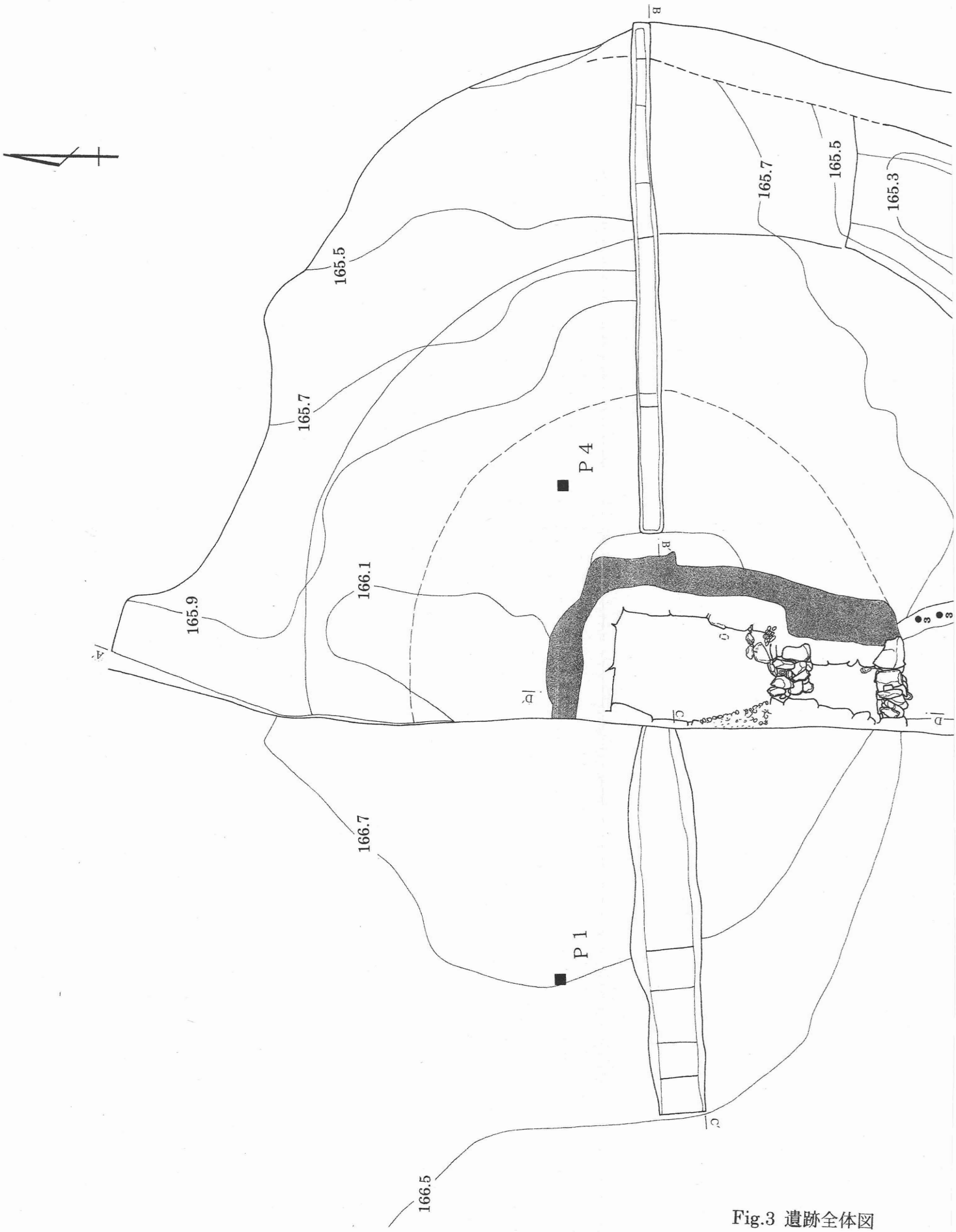
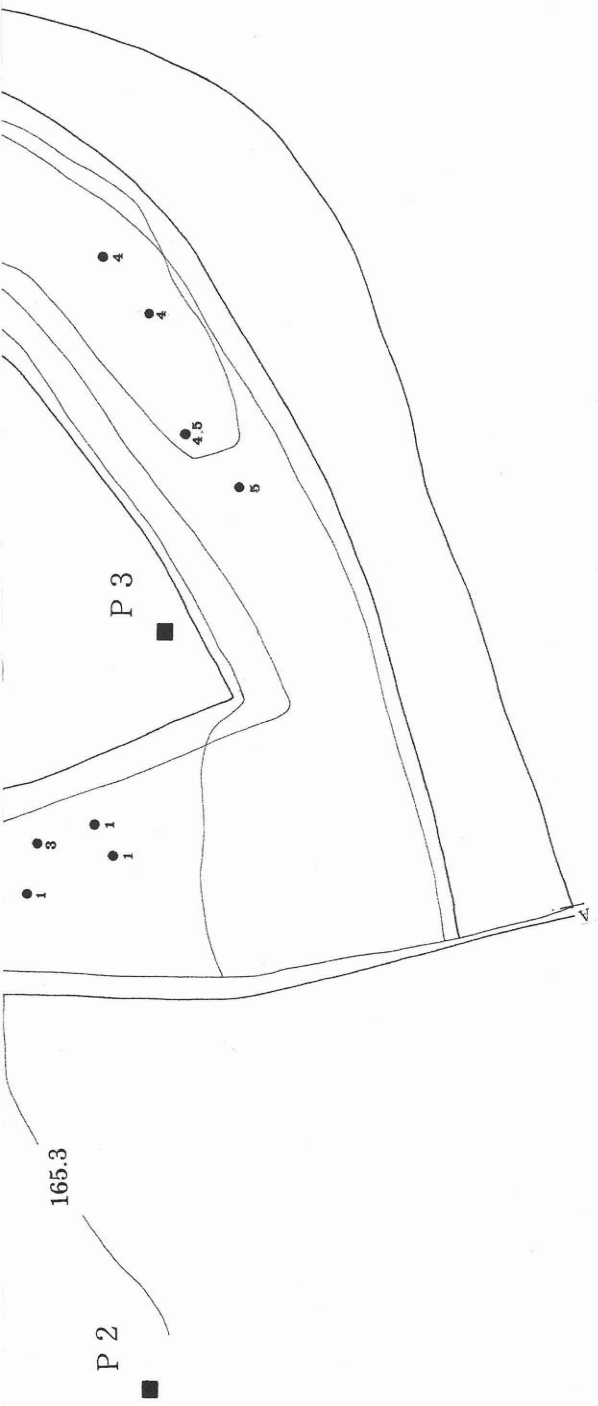
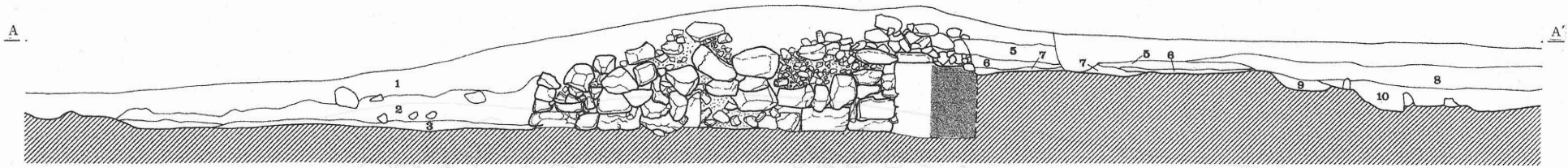


Fig.3 遺跡全体図



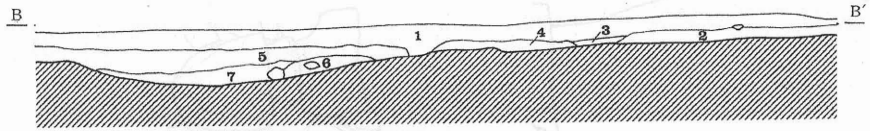
S＝1：80

0 4m



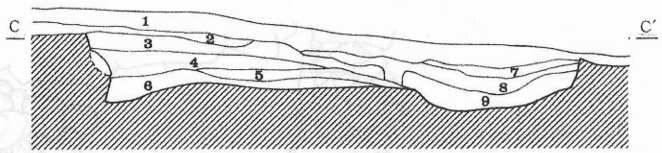
南北ベルトセクション（記号○　○は締まり、粘性の順である）

1	10YR 4/2	灰黄褐色細砂層	△	×	As-C・Hr-FP・As-B 軽石含む。現耕作土
1′	10YR 5/3	にぶい黄褐色細砂層	×	×	現耕作土
2	10YR 3/1	黒褐色細砂層	△	△	As-C・Hr-FP 軽石含む。
3	10YR 4/1	褐灰色細砂層	△	△	As-C・Hr-FP 軽石含む。
4	10YR 4/2	灰黄褐色細砂層	×	△	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。
5	10YR 3/1	黒褐色細砂層	○	×	As-C・Hr-FP 軽石含む。
6	10YR 2/1	黒色細砂層	×	○	As-C・Hr-FP 軽石 5 層より少なく含む。
7	10YR 2/1	黒色細砂層	△	×	As-C・Hr-FP 軽石 6 層より少なく含む。
8	10YR 5/3	にぶい黄褐色細砂層	○	○	As-B 軽石わずかに含む。
9	10YR 4/1	褐灰色細砂層	×	○	
10	10YR 4/1	褐灰色粗砂層	△	×	As-B 軽石混土層、下部に部分的に As-B 軽石純層がある。



東西セクション東側

1	10YR 4/2	灰黄褐色粗砂層	○	×	As-C・Hr-FP・As-B 軽石含む。現耕作土
2	10YR 3/1	黒褐色粗砂層	○	×	As-C・Hr-FP 軽石・黄褐色土ブロック含む。
3	10YR 4/1	褐灰色細砂層	△	×	As-C・Hr-FP 軽石 2 層より少なく含む。
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色粗砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。黒色土ブロック含む。
5	10YR 5/3	にぶい黄褐色粗砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。
6	10YR 3/1	黒褐色細砂層	○	×	As-C・Hr-FP 軽石含む。
7	10YR 3/1	黒褐色細砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。



東西セクション西側

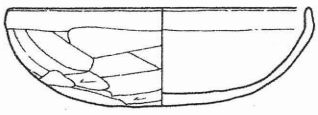
1	10YI 4/2	灰黄褐色細砂層	△	×	現耕作土
2	10Y 3/1	黒褐色細砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石・黄褐色土ブロック含む。
3	10YR 3/1	黒褐色細砂層	△	×	As-C・Hr-FP 軽石 2 層より少なく含む。
4	10YR 2/1	黒色細砂層	○	×	As-C・Hr-FP 軽石多量に混じる。
5	10YR 2/1	黒色細砂層	△	×	As-C・Hr-FP 軽石多量に混じる。
6	10YR 5/6	黄褐色細砂層	△	△	As-C・Hr-FP 軽石含む。黒色土ブロック多量に含む
7	10YR 5/3	にぶい黄褐色細砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。
8	10YR 5/3	にぶい黄褐色細砂層	×	×	As-C・Hr-FP 軽石わずかに含む。
9	10YR 2/1	黒色細砂層	○	×	As-C・Hr-FP 軽石多量に含む。

S＝1：80

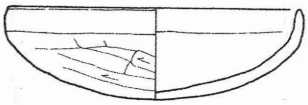
0　4m

Fig.4 セクション図

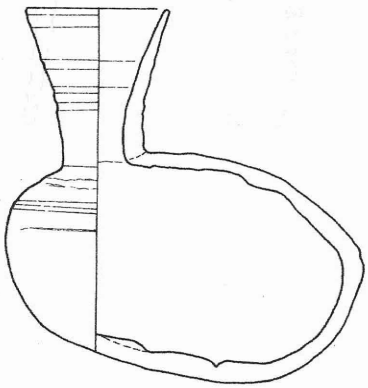
Fig.5 石室実測図



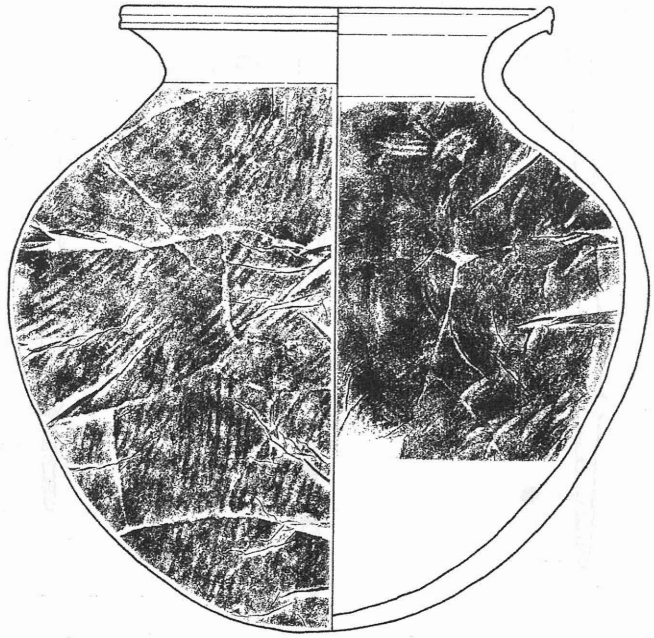
1



2



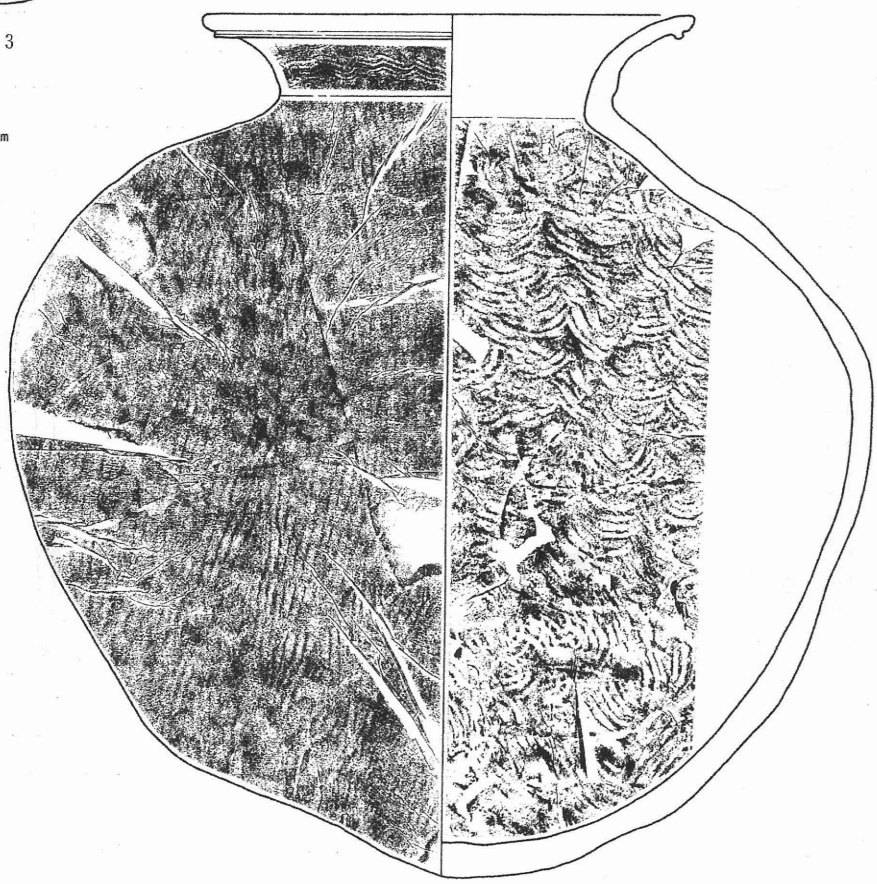
3



4

0 1／3 10cm

（ 1 ～ 4 ）



5

0 1／4 20cm

（ 5 ）

Fig.6 土器実測図

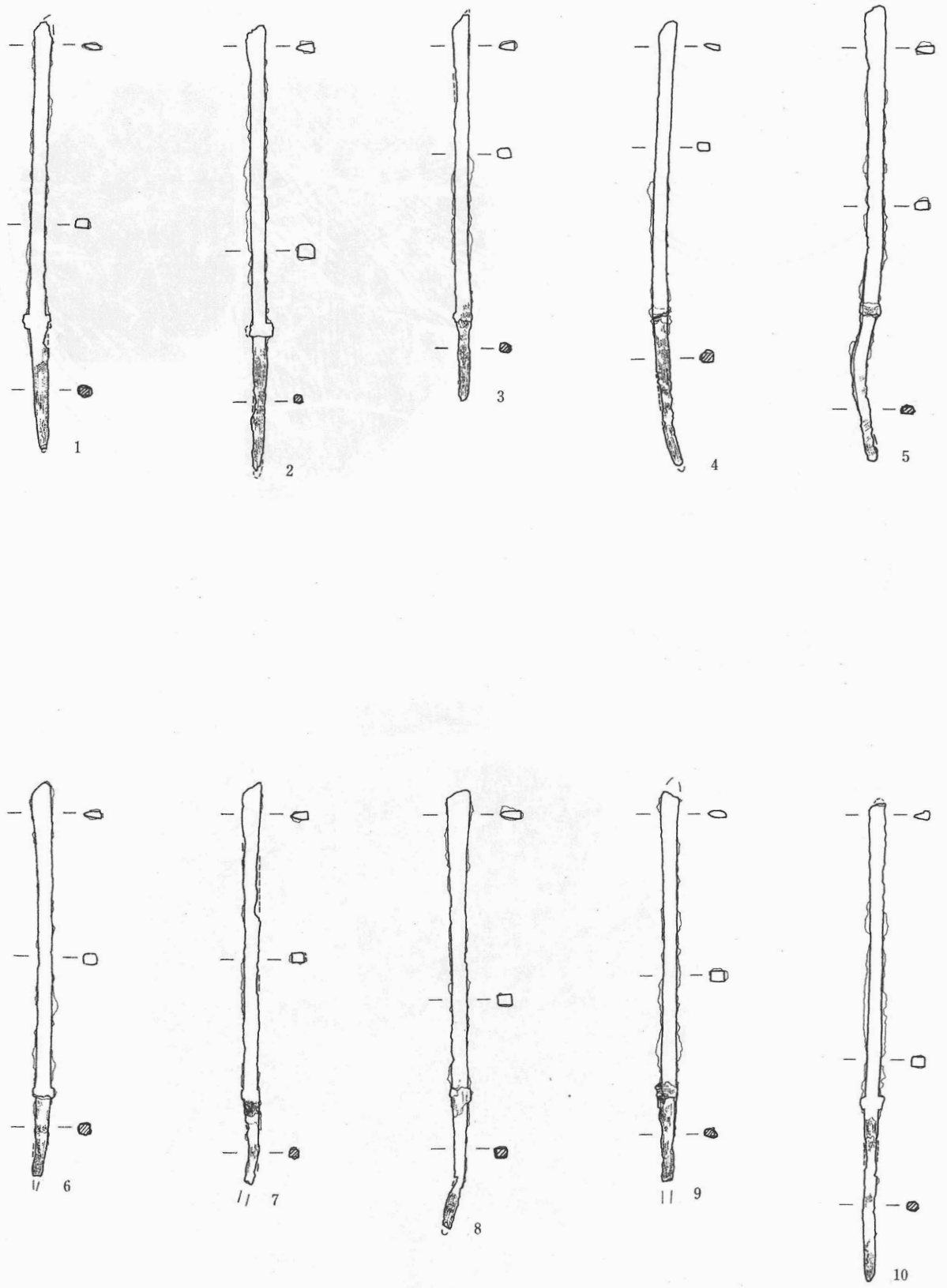


Fig.7 鉄製品実測図（1）

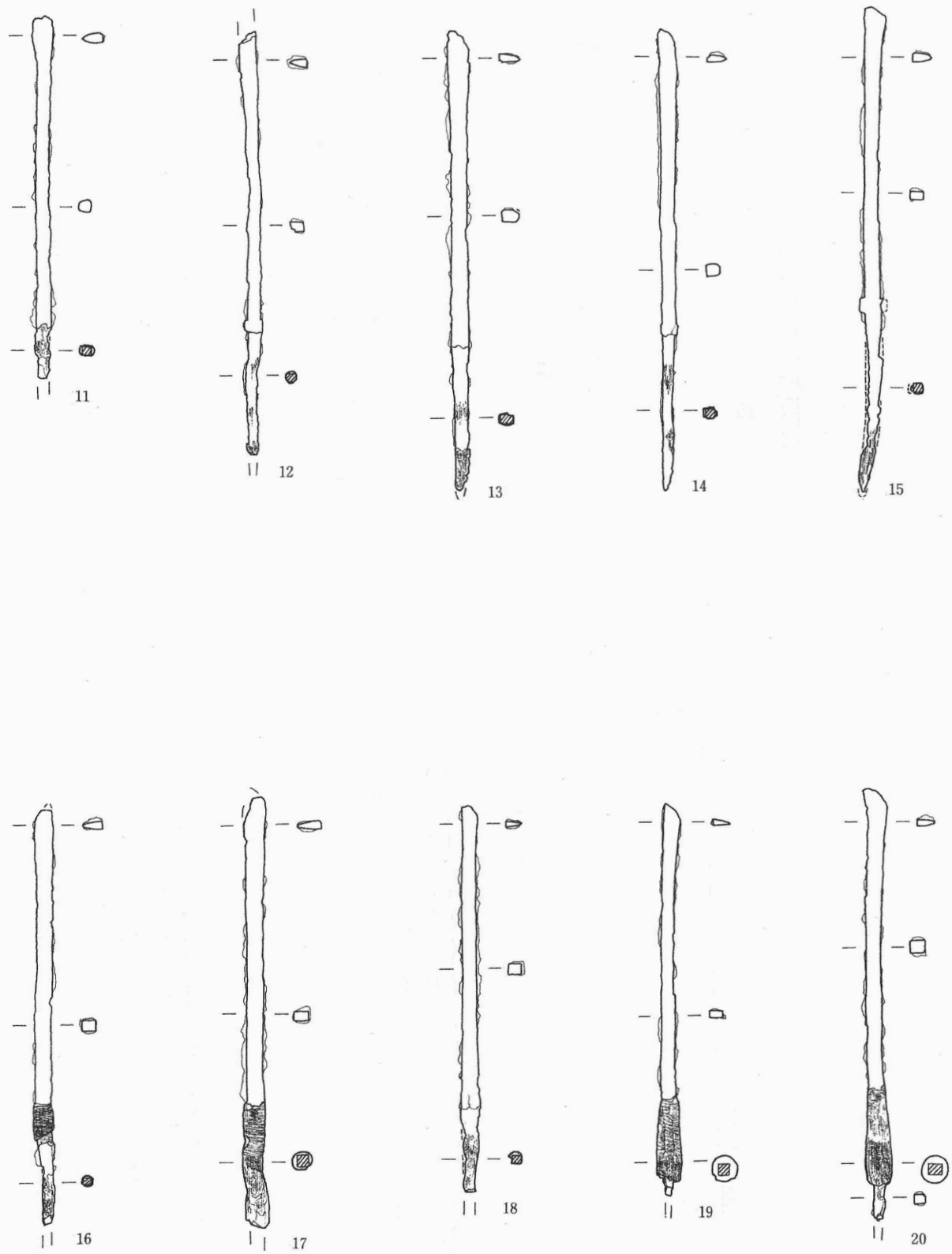


Fig.8 鉄製品実測図（2）

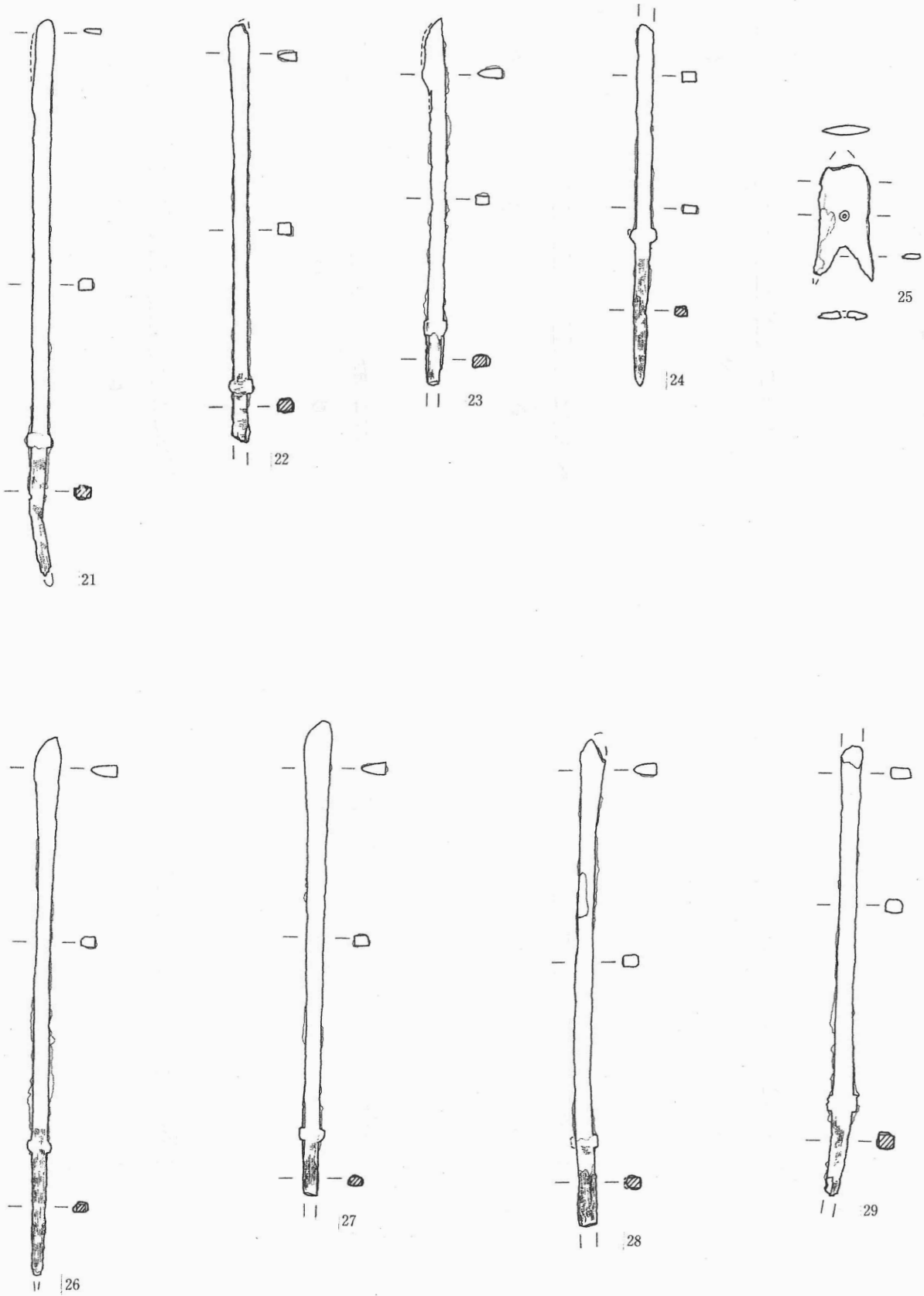


Fig.9 鉄製品実測図（3）

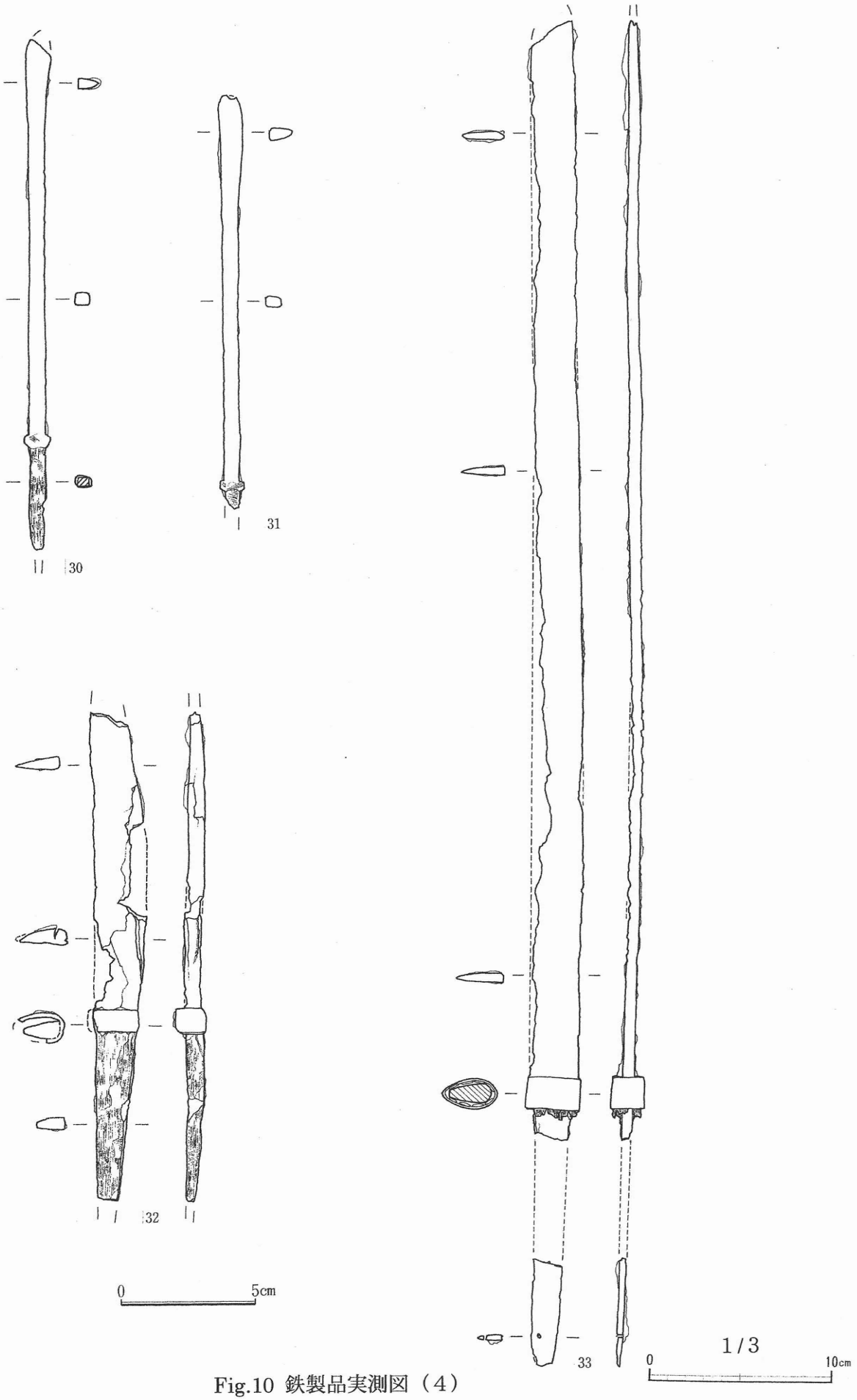
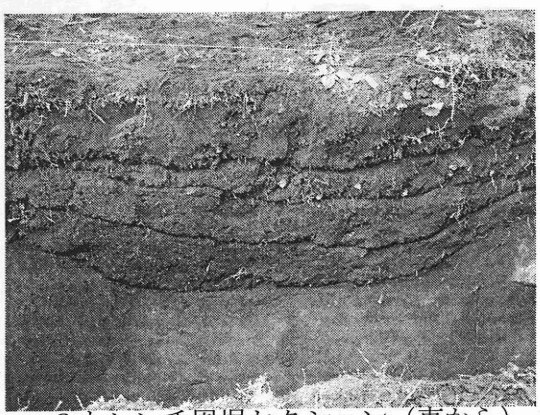


Fig.10 鉄製品実測図（4）

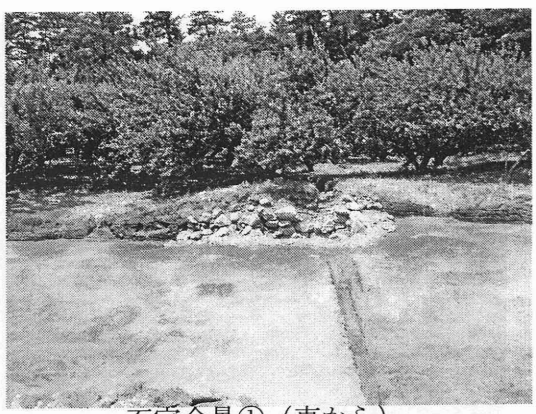
桂萱村６３号墳　全景（南から）

調査前（東から）

２トレンチ全景（東から）



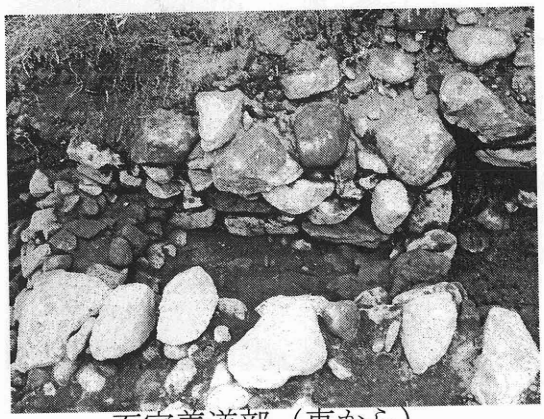
２トレンチ周堀セクション（東から）



石室全景①（東から）

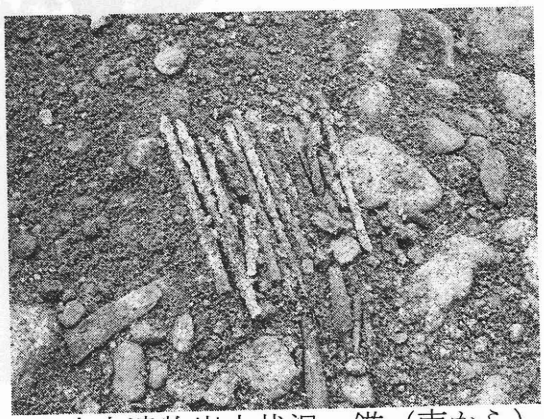
石室全景図②（南から）

石室玄室部（東から）



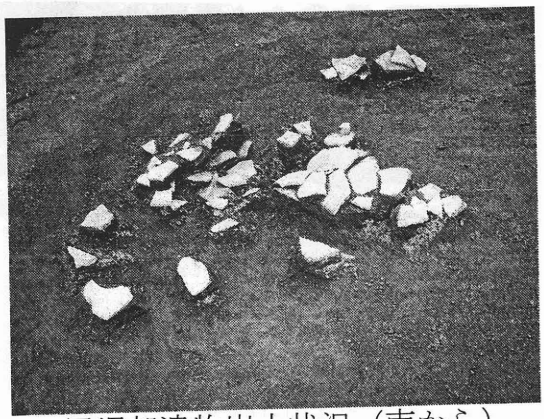
石室羨道部（東から）

石室入口（南から）



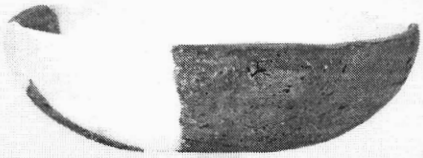
石室内遺物出土状況・鏃（南から）

石室内遺物出土状況・大刀（西から）



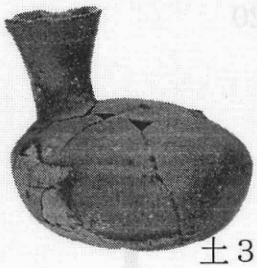
周堀部遺物出土状況（南から）

前庭部遺物出土状況（南から）



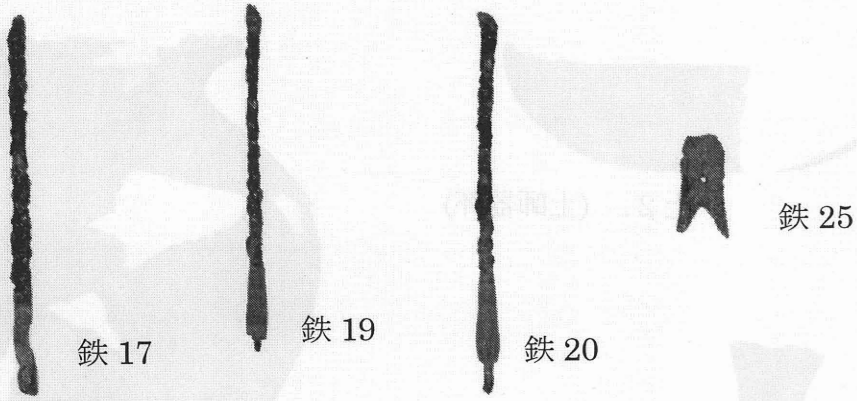
土２．(土師器坏)

土４．(須恵器甕)

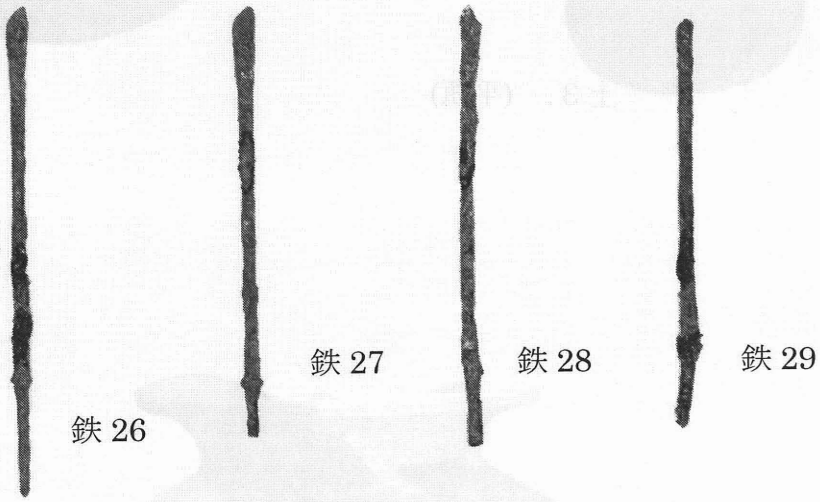


土３．(平瓶)

土５．(須恵器甕)



鉄 17　鉄 19　鉄 20　鉄 25



鉄 26　鉄 27　鉄 28　鉄 29

鉄 32.　(刀子)

鉄 33.　(大刀)

抄　　録

フ リ ガ ナ	ｶｲｶﾞﾔﾑﾗﾛｸｼﾞｭｳｻﾝｺﾞｳﾌﾝ
書　　名	桂萱村６３号墳
副 書 名	土地改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	齊木　一敏　・　大﨑　和久
編 集 機 関	前橋市教育委員会　文化財保護課
編集機関所在地	〒371 － 0018　群馬県前橋市三俣町二丁目10 － 2
発 行 年 月 日	西暦2004年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		位　　置		調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ｶｲｶﾞﾔﾑﾗﾛｸｼﾞｭｳｻﾝｺﾞｳﾌﾝ 桂萱村６３号墳	ﾏｴﾊﾞｼｼｵｷﾞｸﾎﾞﾏﾁ 前橋市荻窪町	10201	15 D 20	36° 25' 07"	139° 07' 52"	20030526 20030612	約100㎡	土地改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ｶｲｶﾞﾔﾑﾗﾛｸｼﾞｭｳｻﾝｺﾞｳﾌﾝ 桂萱村６３号墳	古墳	古墳時代	古墳	土師器、須恵器、鉄製品　他	な　し